

イラク北部多元社会における少数派ヤズィーディーの戦後復興 ——ニーナワー県バアシーカ準地区のオリーブ栽培の事例から——

佐藤 麻理絵*

Post-war Reconstruction of the Yazīdī Minority in Northern Iraq's Pluralistic Society:
A Case Study of Olive Cultivation in Ba'shīqa Sub-district, Nīnawā Governorate

SATO Marie

The purpose of this paper is to identify the composition of the plural society in the northern Iraqi province of Nīnawā area and its transformation, by focusing on the livelihoods of the Yazīdīs. The Yazīdīs are a minority that make up the pluralistic society of northern Iraq, whose history dates back to the 12th century. Throughout history, they have often been the target of attacks as they have been mistakenly perceived as devil worshippers. It focuses on the Ba'shīqa sub-district, located in the Mosul district in Nīnawā, an area where Yazīdīs have historically congregated. Secondary sources such as a regional histories published in 2011 and newspaper articles were used, as well as data from a preliminary survey of local residents, which the author has been conducting since 2022. Particular attention is paid to olive cultivation, the main industry in Ba'shīqa, and the changes surrounding the cultivation which Yazīdīs have been engaged in. Attacks on minority groups including Yazīdīs became more serious following the 2003 war in Iraq. Under these circumstances, the fall of Mosul and massacres against minorities occurred after 2014, when the self-proclaimed Islamic State (IS) expanded its power, resulting in numerous casualties.

Ba'shīqa is a prominent area of irrigated agriculture in northern Iraq, and its rich ecological environment has provided a wealth of bounty. This article clarifies that Yazīdīs have maintained traditions and customs based on their own belief system through olive cultivation, which has been their livelihood for more than 500 years. These traditions and customs have been shared by the inhabitants of Ba'shīqa,, preserving the unity of the population across religious, ethnic and sectarian boundaries. In order to restore an “enviable and friendly atmosphere,” efforts are underway to rebuild their lives and villages following the IS invasion, with 90% of the temporarily displaced population having returned to the area by now.

1. はじめに——目的と問題の所在——

本稿の目的は、イラク北部ニーナワー県 (Muḥāfaẓa Nīnawā) モースル地区 (Qaḍā' al-Mawṣil) に位置するバアシーカ準地区 (以下、バアシーカ、Ba'shīqa) を事例として、主に少数派であるヤズィーディー (al-Yazīdīya) の生業に着目し、同地域における多元社会の構図とその変容を明らかにすることである。使用するのは、2011年に出版された地域史 [Khulū 2011] や新聞記事などの二次資料と、筆者らが2022年より実施している地域住民に対する予備調査のデータである。特に着目するのは、バアシーカにおける主要産業であるオリーブ栽培であり、これに従事してきたヤズィーディーの生業をめぐる変化である。ヤズィーディーは、イラク北部の多元社会を構成する少数派の一つであり、その歴史は12世紀に遡る。後述するように、彼らは悪魔崇拝者と誤解される

* 筑波大学人文社会系助教

などしてしばしば攻撃の対象にされてきた。イラクでは1968年にバアス党政権が樹立し、サッダー・フセイン (Ṣaddām Ḥusayn) 政権が発足すると、ヤズイーディーなどの少数派を対象としたアラブ化政策が推進された。彼らの中には、先祖代々受け継がれてきた土地を追われるなどの迫害を受けた者も多い。少数派への攻撃は、2003年のイラク戦争を受けてより深刻化した。

こうした状況下で、自称「イスラーム国(以下 IS: Islamic State, al-Dawla al-Islāmīya, 通称、ダーイシュ *dā'ish*)」の勢力拡大に見舞われた2014年以降は、特にイラク北部において影響は深刻で、モースルの陥落や少数派に対する虐殺が起きるなどして多数の犠牲者を出した。中でもヤズイーディーは特に攻撃の対象とされ、5,000人以上が虐殺され、女性や子どもの誘拐も相次ぎ、現在も未だ3,000人近くが行方不明のままである [Reliefweb 2021 (Dec. 1)]。ISの支配に協力したモースル市民も見られ、彼らはこれまで共存してきた隣人からも襲撃を受ける事態となった。IS支配が残した最も深刻な爪痕は、宗教的、宗派的、民族的に共存してきたイラクの人びとの間を、修復不能なまでに引き裂いたことであると指摘される [酒井 2018: 23]。

モースルの解放は、2017年7月9日にイラク中央政府より宣言された。しかしながら、ISの支配終焉より5年以上が経過した今も、国内避難民キャンプやクルド自治区などで避難生活をおくる人々は約25万人に上り、彼らの帰還の目処はつかぬままである [UNHCR News and Stories 2021 (May 27)]。ヤズイーディーについても、帰還は一部に留まり、今なお多くが不安定な避難生活を強いられている。貧困や失業状態の長期化は耐え難く、近年よりよい生活を求めて違法且つ危険なルートにてヨーロッパを目指す人びとも増加している [Rudaw 2022 (Sep. 5)]。ニーナワー県においても38% (約180万人) が貧困ラインを下回り生活しているとされ、全体として戦後復興の途上にある [Rudaw 2021 (Mar. 23)]。なお、バアシーカへの帰還は90%達成されており [Epic 2019 (Oct. 16)]、他地域と比べると進展度合いは高く、その理由についても幾つか考察を加えたい。

イラクには多様な民族や宗教、宗派が混在していることから、こうした集団間の不和や対立についてはこれまで多数指摘されてきた。イラクは歴史的に一体性のない領域に形成された人工国家で、その国民国家形成は本質的に上からの暴力的且つ強制的なものであり、民族や宗派間の対立は不可避であると仮定されてきたのである [Baram 1991; Davis 2005; Stansfield 2016]。その中でも少数民族などのマイノリティについては、国民国家形成の過程ではしばしば非人道的な扱いを受けてきたことから、彼らの人権や深刻な迫害については国際NGOなどによるレポートも含めて蓄積がある (例えば [Human Rights Watch 1993; Maisel 2008])。ヤズイーディーについては、その独自の信仰体系が歴史的な迫害の過程とともに論じられてきたと同時に [Acikyildiz 2014; Fuccaro 1999]、2014年のIS侵攻に伴う虐殺や非人道的行為の発生以降は、特に国際的な人権団体やNGOなどにより多数報告されてきた [Amnesty International 2020; Cheterian 2019; Yazda and The Free Yezidi Foundation 2015]。近年では、IS侵攻による迫害がヤズイーディーにとっては国際的な注目を集めた初めての機会となり、彼らの権利をめぐる政治的な運動も初めて萌芽したことが指摘され、新しいアイデンティティ形成の過程が論じられている [Ali 2021; Ali, Pirbari and Rzgoyan 2021]。また、ISが少数派への迫害を通じてイラクの民族・宗教的多様性をどのように脅かしたかについては、イラク国家に対する信頼の危機を再燃させ、特にスンナ派アラブ人との関係性を悪化させたことが指摘される [Isakhan and Gourlay 2022: 1468]。

このように、ヤズイーディーについてはもっぱら彼らの独自の信仰体系やイラク国家における政治的位置、国際的な支援に依拠した自らのアイデンティティ形成過程に注目が集まり、生業に関す

る記述は限られている¹⁾。特に、ヤズィーディーが主たる担い手となり500年以上もの歴史があるバアシーカのオリーブ栽培については、その産業構造や社会的役割、IS 侵攻前後の変化について不明瞭な部分が多い。バアシーカはヤズィーディーの定住による集落の発展により形成され、現在は市街地を中心に準地区として拡張しているが、同地でのオリーブ栽培は彼らにより綿々と受け継がれている。従って、バアシーカは特定の集団が歴史的に形成した社会空間であり、それは本質的にオリーブ栽培という耕種農業を主たる生業とする村落社会であったと考えられる。こうした歴史的経緯の中で実践されてきた彼らの宗教伝統は、生業と密接に関連し、社会関係を内在化させながら展開している。生業への着目は、IS 侵攻後のバアシーカの社会変容を捉える上でも重要である。

対象とするのは、ニーナワー県の東部に位置するバアシーカである。ニーナワー県は、チグリス川が貫通する肥沃な土壌のステップ地帯であり、中でもバアシーカは市街地背後に連なる山々に涵養される地下水に恵まれている。したがって、雨季の降雨のみで行う天水農業が卓越するニーナワー県の中では、灌漑農業の営まれるバアシーカは際立った地域であり、その豊かな生態環境は豊富な恵みをもたらしてきた。中でもオリーブは、山岳地帯の山麓部の広い範囲で主要作物として栽培されており、その担い手は同地域のヤズィーディーで、彼らの主たる生業はオリーブ栽培とその副産物の生産である。次節では、バアシーカの概要とヤズィーディーについて簡潔に論じ、第3節ではIS 侵攻による被害と避難民化の実態を示す。その上で、バアシーカのヤズィーディーの主たる生業であるオリーブ栽培について明らかとなっている点を、IS 侵攻後の復興過程を踏まえながら論じていく。

2. バアシーカ準地区の概要とヤズィーディー

(1) バアシーカ準地区概要

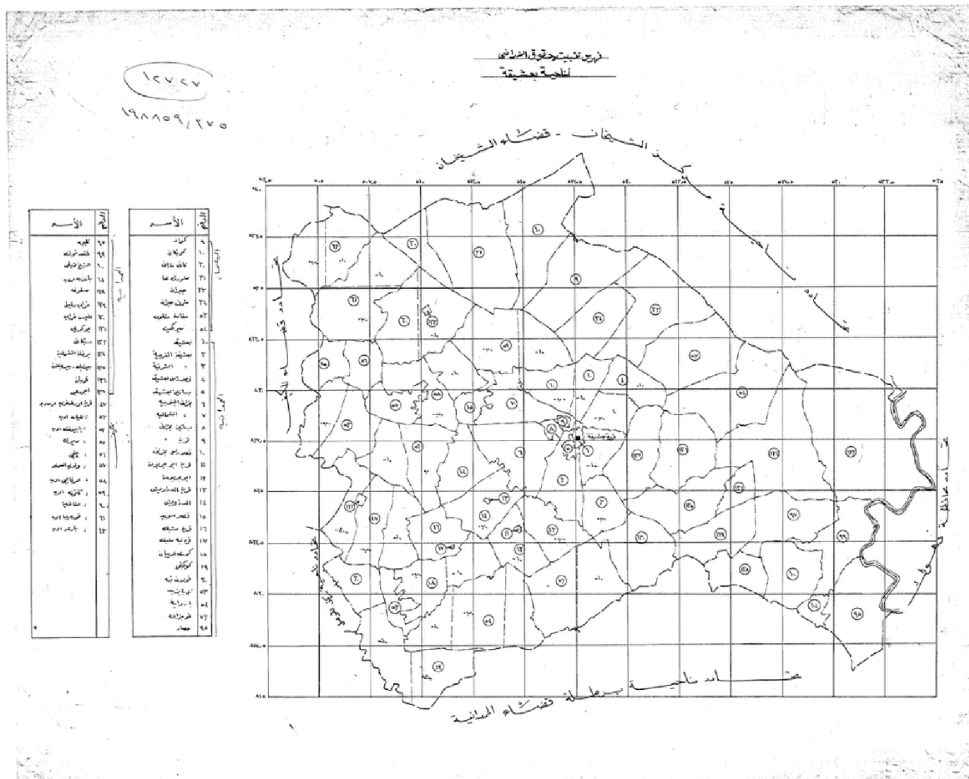
バアシーカ準地区は、イラク北部ニーナワー県東部のモースル地区に位置し、県都モースルから北東に約13キロ離れた場所にあり、その面積は487平方kmである[Al-Raqā 2022: 8]。準地区にはバアシーカ(通称 Markaz)やバフザーニ(Bahzānī)などの主要市街地があり(通称バアシーカ・バフザーニと呼ばれ、二つの市街地が隣り合っ一つの地域を構成している)、その周辺に多数の村々が存在する。1970年頃の土地区分では、主要な村落部は56を数える(図1)。なお、地域史では46の村が紹介されており、人口をシャバクが占める村が19、アラブ人が14、クルド人が8、キリスト教徒の村が2とある²⁾。それぞれ飲料水の水源も明記されており、上水道が整備されておらず浅井戸、自噴井、湧水に頼っている村も多い。

地域史によれば、バアシーカの総人口は1997年に7万4千人であり(表1)、宗教・民族分布は、シャバクが62%、ヤズィーディーが24%、クルド系ムスリムが5%、アラブ系ムスリムが3%、キリスト教徒が5.5%、トルクマンが0.5%である。準地区の中心部にあたるバアシーカ市街地の宗教分布は、ヤズィーディーが70%、キリスト教徒が20%、ムスリムが10%であるとされる。以上から、ヤズィーディーはバアシーカ市街地に集中して居住していることが明らかである。バアシーカ全体で見れば、シャバクとアラブ人の占める村々が多く、市街地では多数派のヤズィーディーとともに他宗教や異なる民族同士が混在しているといえる。

1) ただし、先述した地域史資料[Khulū 2011]や国内避難民の帰還に関するレポートや報告の中では、イラク北部における生業への言及は部分的になされている。国内避難民については、生計手段の確保や復興が実現しなければ彼らの帰還は進まないことから、避難民キャンプでの聞き取り調査などで生業について言及される場合があるが、その詳細については限定的である。

2) ここでは、ヤズィーディーはクルド人に分類されていると考えられる。

図1 バアシーカ準地区地図(1970年頃)



出典——モースル大学人文科学部地理学科
(University of Mosul, College of Education for Humanities, Department of Geography) 所蔵

表1 バアシーカ準地区の人口推移

年	バアシーカ市街地	バフザーニ市街地	準地区内村	合計
1977	4,779	4,074	20,763	29,616
1987	7,538	7,178	34,641	49,257
1997	10,351	10,103	53,612	74,066

出典——[Khulū 2011: 17]

2008年末の準地区の人口は、105,400人に達していた [Khulū 2011: 18]。また、2014年のIS 侵攻以前のバアシーカの人口は、ヤズィーディーやシャバクを中心に約13万5千人とする記述があり [VOA News 2016 (Oct. 24)]、バアシーカ市街地は5万人程であったと推測されている [REACH 2018: 4]。

バアシーカにおける宗教関連施設については、全体の70%がヤズィーディーに関連するものであり、信仰実践の場であるマザール (al-Mazār) は10を数える。キリスト教については、バアシーカに1856年に建設されたシリア・カトリック教会と1890年に建設されたシリア正教会の二つが、バフザーニに1884年に建設されたシリア正教会一つがある。イスラームのモスクは二つあり、それぞれ1963年と2000年に建設されたものである [Khulū 2011: 299]。

生態環境の特徴としては、バアシーカは肥沃でオリーブ栽培の盛んな土地として知られ、その名前は、1979年に出版されたアラブ世界の地理に関する書籍『アラブ祖国における地理的特徴 (*Ma'ālim Jughrāfiya al-Waṭan al-'Arabī*)』において既に言及されている。同書では、イラクにおけるオリーブ生産は北部に限定されるとした上で、モースル県だけでイラク全体の72%のオリーブの木があり、特にバアシーカに集中していることが指摘されている [al-Sayyād 1979: 290]³⁾。オリーブ栽培は、バアシーカの背斜構造と扇状地の利点を生かして歴史的に発達したと考えられる。

加えて重要なのは、バアシーカを含めニーナワー県のヤズィーディー集住地域であるシンジャー (Sinjār) やアイン・シフニー ('Ayn Sifnī) が、イラク中央政府とクルディスタン地域政府 (KRG: Kurdistan Regional Government) との間でその権利が争われている係争地帯に位置するという点である。IS との戦闘やその後の混乱の中で、KRG の軍隊であるペシュメルガは占拠地域を広げ、2017年には KRG はイラクからの独立を問う住民投票を実施した。投票は圧倒的な賛成多数の結果を示したものの、イラク中央政府はこれを抑え込んでいる。バアシーカの様相はより複雑で、住民はイラク軍に対しても、IS から村の解放を成し遂げたペシュメルガにも不信感を抱いているという。ペシュメルガによる治安維持は村の半分以下に留まり、その他の大部分はシャバクにより構成されるシーア派民兵組織である人民動員部隊 (PMF: Popular Mobilization Forces) 第30旅団 (30th Brigade) が抑えている [MERI 2020: 25]。2014年から KRG が実効支配をしてきた地域は、今やその他の多様な治安部隊や民兵が入り乱れる様相を見せており、将来的な領土をめぐる紛争解決への道筋は不透明である。地元警察は、これらの調整や取りまとめに苦慮しており、こうした状況を改善させるべく、イラク政府とペシュメルガが協働して治安維持のための最善を尽くすよう望んでいる [MERI 2020: 25]。ヤズィーディーのような少数派を保護するためにも、安全保障上の空白を作らないようにすることが必要である。

(2) イラク北部の多元社会を構成するヤズィーディー

イラク北部は民族や宗教・宗派の多様性を極めて顕著に有する地域である。アラブ人とクルド人が主要な構成民族でありながら、トルクマンやチェルケス人、シャバク、ヤズィーディーなどが暮らす。宗教においてはイスラームのスンナ派とシーア派に加え、カルデア典礼カトリック教会やアッシリア東方教会などのキリスト教⁴⁾、ユダヤ教、そしてカカイー教やバハイー教、サービア教、ヤズィーディー (ヤズィド教) などの独自の宗教体系を有する少数派がある。民族と宗教の双方にヤズィーディーを明記したのは、クルド語の方言であるクルマンジーを話す人びとが多いことからクルド民族の一つとして認識されることが多く、同時に、イスラームの一派として扱われる場合もあるためである。統一的な見解は確立していないが、例えば自らもヤズィーディーであり、その歴史や IS 侵攻後の動態について論じるマジドは、ヤズィーディーをイラクにおける一つの民族的宗教的集団 (Ethnoreligious group) として位置づけ、民族と宗教双方において独自であると主張している [Ali 2021: 46]。

3) 行政区画の編成がなされる1976年まで、現在のニーナワー県はモースル県と呼ばれており、現在のドホーク県 (Muhāfaza Dahūk) も含む広域の地域を指していた。なお、[al-Sayyād 1979] ではリワール・モースル (Liwa' Mawṣil) とあるが、当時のモースル県を指していると推測される。

4) イラク戦争開戦前である2003年以前のイラクにおけるキリスト教徒の人口は80万人～140万人程であったとされるが、戦後その半数以上が国外に逃れ、IS 侵攻以降は2021年時点でさらに約25万人にまで減少していると推測されている [United States Commission on International Religious Freedom 2022: 3]。キリスト教はその他に、シリア正教会、シリア・カトリック教会、アルメニア・カトリック教会、アルメニア使徒教会、聖公会などの信徒が存在する。

ヤズィーディーは、およそ12世紀から13世紀にかけて、古代メソポタミアの信仰と1162年に没したシェイフ・アディー・イブン・ムサーフィル (Sheikh ‘Adī ibn Musāfir) の教えに基づいて形成された⁵⁾。ゾロアスター教やマニ教、キリスト教、スーフイズムなどの要素が混淆し、イスラーム以前の影響を色濃く受けている [Fuccaro 1999: 9]。また、輪廻転生を信じ、厳格な宗教階層が存在していることでも知られる。何より、神と人間との間を仲介し、神の創造した世界の管理を行うと信じられるマラク・ターウース (孔雀天使) が崇拜対象とされ、サンジャクと呼ばれる孔雀像が信仰のシンボルとされている点に特徴がある。ヤズィーディーには信仰の中心であるマラク・ターウースを頂点とする7人の大天使があるが、イスラームを含む諸宗教では、天使は時に墮天して悪魔となると理解される。そのため、ヤズィーディーは悪魔崇拝者であるとされ、啓典の民 (ahl al-Kitāb) と見なされず、暴力的な迫害や強制的に改宗を迫る事態がオスマン帝国期にまで繰り返されてきた。

言語については、ヤズィーディーのほとんどがクルド語の方言であるクルマンジーを母語とする。唯一、バアシーカに暮らすヤズィーディーはアラビア語を話して暮らす [Ayhan 2021:169]⁶⁾。こうした言語的な特徴から、先述したように、ヤズィーディーはクルドの少数派として論じられることが多く、自らをクルド民族の一部と位置づける者もある。一方で、IS 侵攻時にペシュメルガによる裏切り行為があったことも影響し、クルド人やクルド自治政府とは距離を置くなど、IS 侵攻後のヤズィーディー社会では自らを独自の民族的宗教的集団として認識し、政治的なアイデンティティをも確立させようとする傾向が強まりつつある [Tezcür, Kaya and Sevdeen 2021: 86]。

3. IS 侵攻による国内避難民化と帰還

2014年8月、IS (当時は自称「イラクとシャームのイスラーム国 (ISIS: Islamic State of Iraq and Sham)」) はニーナワー県のシンジャール地区やテルアフール地区 (Tel‘afar)、ニーナワー平原の大部分を占領したことで、これらの地域からは少数派をはじめとする多くの人々が避難を余儀なくされた。2015年3月までに、主にシンジャール地区からは約50万人のヤズィーディーが流出し、その大多数はエルビルを首都とするクルド自治区の中でも主にドホーク県に逃れている [UNHCR 2019: 1]。なお、IS 侵攻により2014年～2017年にかけてイラク全土では約600万人が出身地を追われ、国内や国外各地へと逃れている [IOM 2021: 5]。その結果、イラク北部には、ヤズィーディーの多くが避難したダフーク県をはじめとして、各地に国内避難民キャンプが複数形成されており、2022年9月の時点では、3,812人が国内避難民として存在し、公式の国内避難民キャンプは計26を数える [REACH 2023: 5]。インフォーマルな避難民居住地区は、2022年6月時点で401箇所へのぼり、そのうち国内避難民は376箇所で14,366世帯が確認されている [IOM 2022: 5]。

バアシーカについては、IS の侵攻を受けてヤズィーディーを含め住民全員が村を離れた [REACH 2018: 5]。また、住民全員の避難は、IS が村を占領する前であったという [Arab News 2017 (Aug. 9)]。当時、IS はシンジャール地区に進軍し、戦闘員の動画がオンライン上で公開されたり、路上でヤズィーディーが殺害されたとのニュースも流れていた [Ilyas and Al-Qaidi 2018]⁷⁾。こうした様

5) ウマイヤ朝の大義を支持し、ウマイヤ朝第二代カリフのヤズィード一世を慕うものとして、現在のトルコ南東部からシリア北西部にかけて広がる山岳地帯のヤズィーディーへの言及がなされている古典もあることから、シェイフ・アディーの登場以前に既にヤズィーディーは存在していたと考えられている [Açıkyıldız 2014: 77]。

6) ただし、バアシーカの住民の話すアラビア語は、言語学的な観点においてアラビア語から派生した地域方言であり、発音に特徴があると指摘されている [Saaed and Khuder 2022: 22]。

7) 当時ドホーク県から、故郷バアシーカへ向かい家族を避難させた際の体験を記述したヤズィーディー当事者によるブログ記事であり、筆者はシンジャール地区へのIS 侵攻を耳にしたことで、バアシーカへ急いだ。バアシーカ

子を見聞きしたことで、バアシーカの住民の避難はすぐに行われたと考えられる。その後は、モースル奪還作戦が開始された約1ヶ月後の2016年11月に、バアシーカからはISなどの武装勢力が追い出され、イラク政府軍とペシュメルガにより治安維持が実現している。バアシーカの住民は、その翌年の2017年には依然として避難生活を継続している者が多い状況にあったが [Arab News 2017 (Aug. 9)]、その後徐々に帰還が進み、2019年には90%以上が帰還している [Epic 2019 (Oct. 16)]。また、モースル地区全体ではこれまでに1,591,090世帯が帰還しており、これは同地区より避難した国内避難民全体の68%に相当し、2018年5月以来23%増の比較的高いペースで起きている [IOM 2019: 43]⁸⁾。中でも、バアシーカとモースル市街地 (Markaz Mawṣil) は、治安全般、家屋損壊、生業、生活に必要なサービス、安全と治安、社会的結束のいずれの項目においても深刻度は低いと評価されていることから [IOM 2021: 10]、帰還の進展はこれらの項目で改善が見られことによると言える。

しかしながら、モースル地区全体では依然として76,233世帯が国内避難民として避難生活を続けており、17%が国内避難民キャンプに、83%がそれ以外の場所で自ら住居を借りるなどして暮らしている [IOM 2019: 43]。モースル市街地の中でも西側の被害はより深刻で、さらにその南部に位置するハマーム・アル・アリアル (Ḥammām al-'Alīl) や西部に位置するムハラビーヤ (Muḥallabīya) は、治安全般や生活に必要なサービスなどの分野で深刻度は中程度に位置付けられており、帰還実現は困難な状況にある。地区によって帰還の度合いには差があり、治安の改善や生業の立て直しを可能とする環境整備をはじめとする復興の進み具合に依拠していることが明らかである。

では、モースル地区において、国内避難民の帰還を阻んできた要因は何か。また、ヤズィーディーの帰還を阻む要因はなにか。まず、モースル地区において住民の帰還を阻む第一の要因として挙げられるのはトラウマ、第二は生計手段の機会と社会サービスの欠如、第三は治安への懸念である [MERI 2020: 4]。治安への懸念は具体的に、多様な武装集団の存在や、ISの攻撃継続に対する懸念、地雷や簡易爆発装置 (IEDs: Improvised explosive devices) が残されたままであることが挙げられている。バアシーカ周辺には、2016年のペシュメルガによる解放以降、ISにより埋められた2,000個以上ものブービートラップや地雷が見つかっており、これらの除去作業が急がれた [Al-Jazeera 2016 (Nov. 23)]。IS掃討により村の解放がなされた後も、住民の帰還がすぐには実現しなかったのは、こうした地雷などの爆発物除去の作業が必要であったためである。また、2年以上にわたるIS支配の過程で、ISが隠れ家や脱出ルートとして用いるために網の目状に掘った地下トンネルも、ニーナワー県の住民の生活と治安を脅かす存在である。事実、ペシュメルガによるバアシーカ解放後も、地下トンネルを使用して侵入した自爆テロ犯の攻撃により、住民が殺害される事態が起きている [VOA News 2016 (Nov. 8)]。

ただし、冒頭で示したように、バアシーカでは2019年時点で90%が帰還しており、帰還率は一際高い。IS侵攻時の様子や国内避難民化の過程からは、バアシーカの住民はISが侵攻する前にすべての住民が村を離れていたことが分かっている。そのため、帰還率の高さの理由の一つには、ISによる残虐行為などを実際に目にしておらず、他地域と比べて抱えているトラウマが少ないことが予想される。また、住民の90%が帰還しているということは、住民自身の生活及び村の再建に向けて、住民の大半が動いていることの現れであろう。つまり、治安への懸念は多少ありながらも、

にいた著者の母は、当時ドホーク県から向かおうとしていた娘に、ISはヤズィーディーの男性を虐殺し、女性を連れ去っていると説明し、「ヤズィーディーは逃げている」と話した。

8) モースル地区への帰還は2017年に最も多く実現したが、その多くがISによる破壊被害の比較的小さかったモースル東部に集中していた。

住民同士の結束は比較的強く、不測の事態に対して自ら対処しようとする社会素地があるのではないか。彼らの帰還は、バアシーカの住民が構築してきた豊かな社会関係の上に実現するものであり、次節で述べるような伝統と慣習を備えた環境により実現していると考えられる。

4. バアシーカにおける社会関係と戦後復興——オリーブ栽培を中心に——

(1) 伝統と慣習が織りなす社会関係

バアシーカの住民は「うらやましいほどの親しみやすい雰囲気」の中で長年暮らしてきた、と地域史では彼らの生活についての様子が記述される [Khulū 2011: 314]。バアシーカの住民はあらゆる構成要素を保持しており、宗教においてはイスラームとキリスト教、ヤズイーディーという三つ、民族においてはアラブ人とクルド人、シャバク、そして宗派はスンナ派とシーア派、カトリックと正教会という多様性を持つ。また、彼らは伝統、服装、方言、社会慣習、共同で執り行われる社会行事により一体性を保っている。外から訪問した者は、村の住民の民族や宗教、宗派の違い、女性男性の別も区別することが出来ず、慣習や民間伝承をはじめ、その他において類似しているという [Khulū 2011: 314]。この他にも、バアシーカの住民が共有する地元の音楽、詩、踊り、食べ物、衣服のほとんどは、ある特定の集団に属するものではなく、バアシーカという土地に属するもので、それらは「バアシーキー」の伝統であることが示され、コミュニティの結束は一際強いことが指摘される [Toorn 2012]。

地域史では、バアシーカの住民の類似性について、以下の七つの特徴が挙げられている。第一は、バアシーカの住民が共通の「バアシーカ・バフザーニ」と呼ばれる方言を話す点である。これは先述したように、アラビア語の地域方言として位置づけられる。第二は、婚礼や結婚式の際の民謡などの音楽や歌、踊りが共通しているという点である。第三は、服装が共通である点で、外から来た者は住民の服装で三つの宗教のいずれに属しているかを判断することは出来ないこととされる。第四は、住民は結婚式や葬式、その他の社会行事などに参加するという点である。これはことさら異なる宗教や民族、宗派に関わらず、という点が強調されていると考えられる。第五は、三つの宗教の宗教指導者や年配者から出される指示や助言・指導が、公共の利益のために住民全員に適用・実施される点である。また、社会規範に違反した者は家族や友人、親族らによって社会的責任を問われるもの、とされる。第六は、特定の集団のための特別な地域というのは存在しておらず、異なる宗教・宗派の人たちが一つの地域を共有しているという点である。これはすなわち、特定の場所が特定の住民のために利用されるのではなく、全ての人が開かれているということであろう。例えば、バアシーカの小学校などの教育機関は宗教や民族の区別なく全ての子どもが学ぶ場であり、歴代の校長も民族や宗教・宗派において様々な出自の人物により担われてきた [Khulū 2011: 314]。第七は、「al-Qarīb (al-Qaghayib, クルマンジー方言由来か)」「al-Karīf」「Ibn al-Ḍaiy'a (Ibn al-Zī'a)」の呼称で、バアシーカの住民がお互いを呼び合うという点である。キリスト教徒はムスリムやヤズイーディーに対して、(私にとって)近い人、親しい人、などの意味を持ち、同性性や愛の深さを示す「al-Qarīb」と呼ぶ。ムスリムが、ヤズイーディーに対して「al-Karīf」と呼ぶときは、社会的な家族としての絆の深さを示す⁹⁾。いずれも、血のつながった兄弟、のような意味として、互いを尊敬し合う呼称であることが分かる。また、三つの宗教に属する住民のいずれにも用い

9) 地域史以外でも、「al-Karīf」については、次のように説明される。すなわち、ヤズイーディーとムスリムの間の昔からの慣習として、互いを(洗礼の時の)教父を意味する「al-Karīf」と呼び合ってきた。ヤズイーディーもしくはムスリムの成人男性は、ヤズイーディーもしくはムスリムの男の子を割礼の際に互いに膝に乗せ、両者の二つの家族は血の絆で結ばれるという [Ayhan 2021: 184]。

られるのが、村の息子、を意味する「Ibn al-Ḍaiy‘a (Ibn al-Zī‘a)」である。三つの宗教はこの言葉によってまとまり、バアシーカの住民は平和と安全のためにともに生き、共通の利益のためにお互いを守りあうことを意味し、体現する言葉として使用されてきた。これは、「私の兄」「私の姉」というような近い人同士で使う言葉と同じであると説明される。

その他の特徴としては、バアシーカでは住民の名前について、キリスト教徒がムスリムの名前を有していたり、その逆も多数見られる。また、住民の着用する洋服は黒い布で織られた「al-Bāliyūz」と呼ばれるものであり、かつて住民が家畜の毛や綿で織っていた。なお、バアシーカは、紀元前705年から681年に在位した新アッシリア帝国の王であるセンナケリブ(Sennacherib)により、インドから綿の種がもたらされた地域であり、イラクで最初に綿栽培が始まった土地であるという [Khulū 2011: 319–320]。地域史では、村の主要産業として、綿、ごま、玉ねぎ、そしてオリーブ生産が挙げられている。

(2) オリーブ栽培にみる戦後復興

バアシーカの主な産業は農業であり、中でもオリーブとその加工品は主たる生産物である。その歴史は500年以上と長く、ヤズィーディーによって何世代にも渡り受け継がれてきた。しかしながら、ISが侵攻時にまず行ったのは、オリーブ園や果樹園に火を放ち、何十年にもわたり繁栄してきた地域の産業を破壊することであった [Middle East Eye 2018 (Dec. 15)]¹⁰⁾。戦闘により、オリーブ畑だけでなく関連施設であるオリーブオイルの精油場や、オリーブ石鹸の工場なども被害を受けた。

図2は、住民への聞き取りから、バアシーカにおける主要生産農作物と、派生して生産される副産物をまとめたものである。そのうち国内外に輸出されているものはオリーブ関連ではオリーブオイルと、オリーブ果実やヘビメロンなどを酢で漬けたトルシー(中東全域で食されているピクル

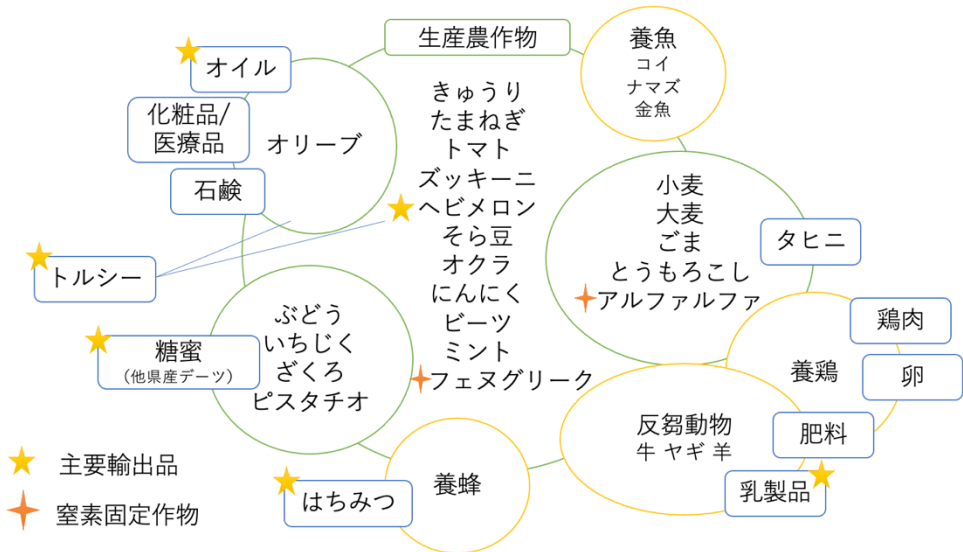


図2. バアシーカ準地区における主要生産農作物・関連産業・副産物

出典——筆者らによる聞き取り調査(2022年5月)

10) また、ISはオリーブの木々の根に毒を撒いたと指摘されており、多くの木々が枯死した。

ス(一種)が挙げられる。その他には生のゴマをペースト状にしたタヒニや、糖蜜、ヘビメロン、はちみつ、乳製品が挙げられている。また、図には含まれていないが、デーツを利用したアルコール飲料の一種であるアラクの生産もなされている [Arab Weekly, 2020 (Oct. 24)]。

図からは、フェヌグリークとアルファルファが窒素固定作物であることから、土壤環境を豊かにする一要素として存在していることが分かる。窒素固定作物は、空气中に多量に存在する窒素分子を取り込み生物が利用可能な窒素化合物に変える事のできる作物を指す。加えて、養鶏による鶏糞は、窒素を多く含む有機肥料として土壤に有用であり活用されている。ただし、土壤への窒素供給は化学肥料に大きく依存している。

オリーブについては、バアシーカでは2008年に296,790本が存在していたとされ、ニーナワー県のオリーブの木々のほとんどが同地にあることが分かる [Khulū 2011: 115]。その内、採油目的のものは17%であるとされる。イラクにおけるオリーブの木については、1978年にニーナワー県全体で60,500本を数え(イラク全体では320,000本)、2005年には360,000本(イラク全体では1,129,806本)へと増加している。

住民への聞き取りからは、農業に欠かせない水資源の不足が指摘され、すなわち渇水が深刻化していることが分かる。これは地下水の枯渇が主な原因と考えられるが、ISによる農業用水設備や上下水道システムの破壊も、深刻化の原因として考える。以下は、バアシーカの農業について聞かれたことの一部である。

「降雨量が減少し、干ばつも深刻で、農業生産の量は減少し、質も低下している。バアシーカでは、(耕種)農業が最も重要であり、次いで、子牛、牛、鶏の飼育、蜂(養蜂)、牛乳(生乳)、魚(養魚)に取り組んでいる。オリーブ栽培、夏季の灌漑農業や冬期(雨季)の天水農業、温室での農作物栽培も家畜の飼育も、イラク政府からの支援は無く、私費に頼って行っている。」(バアシーカ住民への質問表に基づく調査、2022年5月)※()内は筆者補足

「灌漑は点滴灌漑とスプリンクラーにより行われている。飲料水は、山の井戸水を浄水と脱塩装置(フィルター)を用いた後で供給されている。井戸水の塩分濃度はそこまで高くない。地下水は山間部で貯水池へと汲み上げられ、上水道管系を経て、各家屋の屋上に設置されたタンクに供給され、フィルター装置に送られる。山間部の井戸水は、容量15万リットルのコンクリート製タンクか、容量4万リットルの金属製タンクに貯水されている。」(バアシーカ住民への質問表に基づく調査、2022年5月)※()内は筆者補足

バアシーカの住民は、降雨量の減少に見舞われ、近年深刻化する気候変動の影響を少なからず受けていると考えられる。また、イラク中央政府からの支援がないことに不満を抱えており、ISにより焼失したり破壊されたりした農地の復興のために、失われた種子の購入や温室などの再建に必要な資材などの金銭的な負担を強いられていることが伺える。また、ウクライナ戦争などの世界情勢により、全世界的に肥料などの農業資材は高騰しているため、バアシーカの農業従事者は今後より一層の負担を強いられる可能性がある。

また、バアシーカ準地区やニーナワー県、ひいてはイラク全土にとって深刻なリスクとされるのが、モースル・ダムが決壊による洪水の可能性である。モースル・ダムは、チグリス川上流に1984年に建設され、モースルやエルビルなどのイラク北部の都市人口を養う主要な水源である。その規

模はイラク国内で最大であり、水溶性の石膏を多く含む地盤に築かれたことから完成当初より構造上の欠陥を抱えてきた。2014年、ダムはISにより一時的に制圧され、その支配は11日間のみであったものの、イラク政府による奪還後も定期的なメンテナンスは疎かとなり、米中央軍司令官は米国議会にてダム決壊の危機について警告を発している [Al-Jazeera 2016 (Dec. 11)]。モースル・ダムが決壊すれば、都市モースルは4時間後に水没し、2日でバグダードに達するとされ、ティグリス川沿いの住民50万～147万人が犠牲になる可能性がある。

5. おわりに

バアシーカは、イラク北部の中でも灌漑農業において際立った地域であり、その豊かな生態環境は豊富な恵みをもたらしてきた。中でもオリーブ栽培はヤズィーディーの生業として500年以上もの歴史があり、彼らはイラクの少数派として独自の信仰体系に基づく伝統と慣習を保持してきた。こうした伝統と慣習は、バアシーカの住民に共有され、宗教や民族、宗派の垣根を超えた住民の一体性が保持されてきた。「うらやましいほどの親しみやすい雰囲気」を取り戻そうと、IS侵攻後の復興に向けて、一時は避難を余儀なくされていた住民の90%が現在までに帰還しており、生活と村の再建に向けた努力が続けられている。

現在までに収集できた情報は断片的であり、ヤズィーディーの戦後復興については、IS侵攻後にどのように変化したのか、生業としてのオリーブ栽培やその他の社会関係の修復はいかなる状況にあるのか、など多数の疑問点について追加の情報収集を継続しながら取り組む必要がある。生業としてのオリーブ栽培と社会関係については、現地での参与観察を含む地域研究の手法が有用であるが、治安の状況から現地渡航が難しい地域であることも大きな障壁として課題である。調査手法についても手探りの中で進めており、バアシーカの社会と生業の実態、そして社会関係についての実態をどのように掴むのかは、共同研究として実施している本研究の強みをどのように活かすのか、という点にも関係する。

いずれは、自然現象と生物資源生産、社会現象の相互作用に関する議論展開とイラク北部の地域研究深化を目指し、バアシーカ社会の調査を継続していく予定である。また、IS侵攻後の戦後復興に寄与するべく、地域住民レベルで実現可能な水・栄養塩管理手法について、具体的には雨水ハーベスト施設の建設に向けた候補地選定や、施設の仕様について提案することも検討している。こうした提案は、バアシーカにおける民族・宗派の枠組みを超えた雇用の創出、ひいては、難民帰還と多元社会の構築に寄与する可能性がある。

謝辞：

本稿は2022～2023年度JSPS二国間交流事業共同研究、及び京都大学「学際・国際・人際合事業「知の越境」融合チーム研究プログラム(SPIRITS)」の研究成果の一部をなす。

参考文献

酒井啓子 2018 『9.11 後の現代史』 講談社。

Al-Raḍā, Aḥmad ‘Abd al-Amīr. 2022. *Taqṣīm Namūdhaj al-Irtifā‘āt al-Raqmīya li-Taḥdīd Mawāqī‘ Mustajmi‘āt al-Miyāh fī Muḥāfaẓa Nīnawā bi-Istikhdam Barnāmaj QJIS*. Jāmi‘a al-Mawṣil.
al-Ṣayyād, Muḥammad Maḥmūd. 1979. *Ma‘ālim Jughrāfiya al-Waṭan al-‘Arabī*. Dār al-Nahḍa al-‘Arabīya lil-Ṭibā‘a wal-Nashr wal-Tawzī‘.

- Khulū, Mumtāz Ḥusayn Sulaymān. 2011. *Ba'ashīqa: Balda al-Zaytūn wal-'Aṭā'*. Dahūk: Manshūrāt al-Hay'a al-'Ulyā li-Markaz Lālish.
- Açıkyıldız, Bîrgül. 2014. *The Yezidis: The History of a Community, Culture and Religion*. New York: I.B. Tauris.
- Ali, Majid Hassan. 2021. "Historical and Political Dimensions of Yezidi Identity before and after the Firman (Genocide) of August 3, 2014," in Gunes Murat Tezcur ed., *Kurds and Yezidis in the Middle East: Shifting Identities, Borders, and the Experience of Minority Communities*, London: I.B. Tauris, pp. 43–58.
- . 2022. "The Forced Displacement of Ethnic and Religious Minorities in Disputed Areas in Iraq: A Case Study of the Post-2014 Yazidi Minority," *AlMuntaqa* 5(1), pp. 76–89.
- Ali, Majid Hassan, Dimitri Pirbari and Rustam Rzgoyan. 2021. "The Reformation and Development of Yazidi Identity from Theoretical and Historical Perspectives," *Ethnopolitics* 21(3), pp. 258–277.
- Amnesty International. 2020. *Legacy of Terror: The Plight of Yazidi Child Survivors of ISIS*. London: Amnesty International. <<https://d21zrvtkxtd6ae.cloudfront.net/public/uploads/2020/07/report-iraq-yazidi.pdf>>
- Ayhan, Tutku. 2021. "'We are Yezidi, being otherwise never stopped our persecution': Yezidi perceptions of Kurds and Kurdish identity," in G.M. Tezcür ed., *Kurds and Yezidis in the Middle East: Shifting Identities, Borders, and the Experiences of Minority Communities*. London: I.B. Tauris, pp. 167–183.
- Baram, Amatzia. 1991. *Culture, History and Ideology in the Formation of Ba'athist Iraq: 1968–89*. New York: St. Martin's Press.
- Cheterian, Vicken. 2019. "ISIS Genocide against the Yazidis and Mass Violence in the Middle East," *British Journal of Middle Eastern Studies* 48(4), pp. 629–641.
- Davis, Eric. 2005. *Memories of State: Politics, History and Collective Identity in Modern Iraq*. Berkeley: University of California Press.
- Fuccaro, Nelida. 1997. "Ethnicity, State Formation and Conscription in Postcolonial Iraq: The Case of Yazidi Kurds of Jabal Sinjar," *International Journal of Middle East Studies* 29(4), pp. 559–580.
- . 1999. *The Other Kurds: Yazidis in colonial Iraq*. London and New York: I.B. Tauris.
- Human Rights Watch. 1993. "Genocide in Iraq: The Anfal Campaign against the Kurds," *Human Rights Watch*. <<https://www.hrw.org/reports/1993/iraqanfal/>>.
- Ilyas, Bahaa and Roza Al-Qaidi. 2018. "The Yazidi Genocide: A Personal Perspective," *LSE blog*. <<https://blogs.lse.ac.uk/mec/2018/05/10/the-yazidi-genocide-a-personal-perspective/>>.
- IOM. 2019. "Protracted Displacement Study: An In-Depth Analysis of the Main Districts of Origin." <<https://reliefweb.int/report/iraq/protracted-displacement-study-depth-analysis-main-districts-displacement>>.
- . 2021a. "An Overview of Displacement in Iraq: DTM Integrated Location Assessment V, 2020." <https://iraqdtm.iom.int/files/ILA/2021322157136_iom_DTM_ILAV_An_Overview_of_Displacement_in_Iraq.pdf>.
- . 2021b. "Return Dynamics in Ninewa Governorate." <https://iraqdtm.iom.int/images/ReturnIndex/2021613925714_iom_dtm_Return_Dynamics_in_Ninewa_May2021.pdf>.

- . 2022. “Informal Sites Assessment 2022. DTM Integrated Location Assessment VII, 2022.”
 <<https://reliefweb.int/report/iraq/iom-iraq-informal-sites-assessment-2022-dtm-integrated-location-assessment-vii-2022>>.
- Isakhan, Benjamin and William Gourlay. 2022. “State-society relations and inter-communal dynamics in conflict: Non-Muslim minorities in post-IS Iraq,” *Nations and Nationalism* 28(4), pp.1459–1473.
- Maisel, Sebastian. 2008. “Social Change Amidst Terror and Discrimination: Yazidis in the New Iraq,” *The Middle East Institute Policy Brief* 18, pp. 1–9.
- MERI. 2020. “Ninewa Plains and Western Ninewa: Barriers to Return and Community Resilience,” *Middle East Research Institute*. <<https://www.usip.org/publications/2020/04/ninewa-plains-and-western-ninewa-barriers-return-and-community-resilience>>.
- REACH. 2018. “Baashiqā Area Based Assessment – July 2018.”
 <<https://reliefweb.int/report/iraq/baashiqā-area-based-assessment-july-2018>>.
- . 2023. “IDP Camp Profiling Round XVI, June–August 2022 – July 2018.”
 <<https://reliefweb.int/report/iraq/iraq-idp-camp-profiling-camp-directory-round-xvi-june-august-2022>>.
- Saaed, Saaed A. and Wafaa Sabah Khuder. 2022. *The Language of the People of Bashīqā: A Vehicle of their Intangible Cultural Heritage*. (CREID Working Paper 14), Coalition for Religious Equality and Inclusive Development, Brighton: Institute of Development Studies.
 <https://opendocs.ids.ac.uk/opendocs/bitstream/handle/20.500.12413/17610/CREID_Working_Paper_14.pdf?sequence=1>.
- Stansfield, Gareth. 2016. *Iraq: People, History, Politics*. Cambridge: Polity.
- Tezcür, G. M., Z. N. Kaya and B. M. Sevdeen. 2021. “Survival, coexistence, and autonomy: Yazidi political identity after genocide,” in G. M. Tezcür ed. *Kurds and Yazidis in the Middle East: Shifting Identities, Borders, and the Experiences of Minority Communities*. London: I.B. Tauris, pp.77–96.
- Toorn, Christine van den. 2012. “Iraq al Masagher: National politics challenge local peace in Bashīqā,” Institute of Regional & International Studies, American University of Iraq, Sulaimani.
 <<https://auis.edu.krd/iris/publications/iraq-al-msagher-national-politics-challenge-local-peace-bashiqā>>.
- UNHCR. 2019. “COI Note on the Situation of Yazidi IDPs in the Kurdistan Region of Iraq.”
 <<https://www.refworld.org/pdfid/5cd156657.pdf>>.
- United States Commission on International Religious Freedom. 2022. “2021 Report on International Religious Freedom: Iraq,” Office of International Religious Freedom.
 <<https://www.state.gov/reports/2021-report-on-international-religious-freedom/iraq/>>.
- Yazda and The Free Yazidi Foundation. 2015. *ISIL: Nationals of ICC States Parties Committing Genocide and other Crimes against the Yazidis*. The Free Yazidi Foundation. <<https://www.freeyazidi.org/wp-content/uploads/Corr-RED-ISIL-committing-genocide-ag-the-Yazidis.pdf>>.

Arab News

Arab Weekly

Epic

Middle East Eye

Relief web

Rudaw

UNHCR News and Stories

VOA News